

一人ひとりに最高の医療を

医学の進歩とともにがんの治療法も改善され、患者が治療法を選択できる時代になった。北大病院は高度で専門的な治療を推進するとともに、地域の病院・医院と連携しながら、一人ひとりに合った医療を提供している。

バランスのとれた外科手術を



近藤 哲

Kondo Satoshi

医学研究科 教授



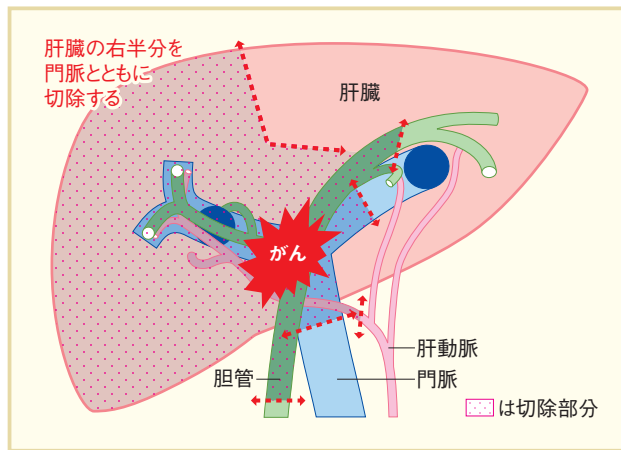
性と、手術後の臓器のはたらきを保つ安全性との釣り合いを考えなければならぬ。

学生時代はラグビー部でフルバックを守っていた近藤さん(医学研究科外科学講座教授)。心臓外科医であった父の背中を見て育ち、「幼い頃から自分も外科医になると思っていましたね」と微笑む。

がんの外科的治療で医師が最も頭を悩ますのは、根治性と保全性のバランス。がんの病巣をどれだけ取り去るかという根治

「大学病院の役割は地域の病院で治療が困難な症例に挑み、一人でも多くの患者さんを救うことです。ここでは根治的な手術手法の開発と同時に、保全性も追求することが必要です。患者さんの幸せを考えて最適なバランスを見極め、必要最低限の切除範囲を特定する。これが私の最も重視している点です。」こうした手術手法の開発を、種々の分野にまたがった多様な科学的知見に基づいて行うことができるのは、総合大学である北大の強みだと近藤さんは述べる。

また、「高度な外科治療が北大でしかできない、ということでは意味がありません。その治療を地域のものとして一般化させる



2005年、近藤さんが開発した進行胆道癌に対する新たな根治切除手術(肝臓・胆管に血管も含めた一括切除術)の模式図。

ことが大切です」と、地域医療の活性化にも力を入れる。

「北大は研究と臨床活動のいずれも大変恵まれた環境にあります。若いみなさんは、ぜひ北大で学んでほしい。また、外科医は命の重みに向き合い、がんばった分だけやりがいを得られるすばらしい職業です。医師を目指すみなさんには、ぜひ外科医療の道を志してほしいですね。」

患者さんのニーズに応える医療サービスを

小野塚 美香

Onozuka Mika

北海道大学病院 看護師長

北大病院には多くのがん患者が入院あるいは通院している。北大病院の総力を結集し、がん治療をサポートする「腫瘍センター」のがん相談室のスタッフ、小野塚さんに話を聞いた。「私たちの仕事は、患者さんと病院や社会を結ぶ『ハブ』となること。担当する業務は、病院内外からのがんについての相談をはじめ、退院後に通院する病院や介護施設の紹介、介護メニューについての相談や高額医療費助成制度の紹介など、生活全般に渡っている。支援の情報を提供するためには、患者の健康状態はもちろんのこと、家族

一人ひとりに合った がん治療の時代へ



秋田 弘俊
Akita Hirotochi
医学研究科 教授

人のために役に立ちたいという思いから医師を志した秋田さん(医学研究科腫瘍内科学分野教授/北大病院腫瘍内科長)。医学部在学中からがんに興味をもっていた。大学院進学後、理学部動物物染色体研究施設で肺がんの染色体異常や発がん物質による染色体異常の個人差について、医学部ではがん遺伝子について研究指導を受けた。その後、米国立がん研究所でがんの分子生物学を研究し、帰国後は北大でがんの研究と治療に携わる。

「がんの性質は人によって異なる。これからのがん治療では、個別化された治療が求められる」。がんは遺伝子に異常が発生し

て起きる病気。同じ臓器のがんでも、一人ひとりのがんでは遺伝子異常が異なる。また、がん治療は、基本的に進行段階によって方法が変わる(左図参照)。

薬物療法で使われるがん治療薬は、現在種類が豊富になり、その進歩はめざましい。近年の分子生物学の進歩によって、分子標的治療薬(※)が開発されたためだ。

秋田さんが研究しているのは効果予測バイオマーカー。最も効果の高い治療薬を事前に、あるいは治療開始後早期に知ることに応用できる。この研究によって、各人に

がんの治療法の例	
局所にとどまるがん	外科療法(手術による切除)
やや進んだがん (局所から近傍に広がる)	薬物療法(抗がん薬)と放射線療法の併用
進行がん (別の臓器などにも転移)	薬物療法 (抗がん薬、分子標的治療薬)
再発したがん	薬物療法 (抗がん薬、分子標的治療薬)

合った薬剤の選択や効果予測が可能になり、がん治療薬のオーダーメイドが実現されつつある。結果として、無駄な治療の排除や、患者への負担の軽減、医療費削減などにも役立つだろう。

こうした個別化治療のプロセスは、確かな効果が臨床試験で認められると、やがて標準治療として確立される。その繰返しにより個別化治療も進化し、実用化される。

「がん治療は、医師や看護師、薬剤師など、チームの協力があつて成し遂げられる。そのため、一人ひとりの患者さんについて、情報をチームで共有するのが大切」という秋田さん。心がけるのは患者とのコミュニケーション。一人ひとりの患者のニーズをくみ取って不安を取り除くように気を配る。「治療効果が上がって患者さんに喜んでもらえるのが何より」と優しく語る。「がんは生命科学の対象としても、医療・ケアの対象としても、とても大切でやりがいのある領域。多くの若い人が関心をもつて、関わってくださることを期待しています」。

(※)がんに関わる分子にピンポイントで効果を発揮する薬。



構成や本人を取り巻く状況などを把握する必要がある。「医療制度が変わり、入院期間が短くなるなかで、一人ひとりの患者さんがどのような適切な医療サービスを受けることができるか、情報を提供しています」。

がん治療で小野塚さんが一番大切に考えているのは、患者本人または家族が治療法を決めることだという。現在はさまざまな治療法があり、それぞれに長所と短所がある。「治療法を患者さんに正しく理解してもらい、どの治療法を選択するかを支援することも、私たちの大事な仕事です」。

この仕事は患者との付き合いがずっと続く。退院後の元気になった患者を見かけることが何よりの励みという。「病棟で担当していた看護師にも、退院したあとの様子を教えて、一緒に喜んでいきます」。小野塚さんに笑顔が浮かぶ。

北大は「がん」に立ち向かう